

クローズアップ NGO・NPO

特定非営利活動法人

熱帯森林保護団体
事務局長 白石 絢子

地球の裏側、アマゾンと日本の深いつながり

■ エコ、環境配慮、循環型社会を支える、変わらぬ現実

今から4年前の2009年、ブラジル政府は巨大ダム、ベロモンチ水力発電ダムの建設計画を立ち上げ、現在その建設工事が進んでいます。このダム計画では、建設地であるアマゾン川の支流シングー川は100kmに渡り干上がり、400㎦というハツ場ダム132個分ものジャングルが水没し、世界3番目の大きさを誇る水力発電ダムができます。

1989年、イギリス人の歌手スティングが、急速に進むブラジルでの大規模森林伐採の現状を知り、“熱帯林を守ろう”と、世界16か国ツアーを行いました。スティングが世界ツアーの実施に至った理由の一つが、シングー川流域での巨大ダム建設計画でした。そのため、シングー川流域に位置するシングー先住民国立公園から、カヤポ族の長老ラオーニとその甥メガロンがこのツアーに参加し、一緒に世界を回りました。ラオーニはブラジルの先住民を率いるカリスマ的存在です。そのツアーで日本を訪れた彼らに出会ったのが、私たち特定非営利活動法人熱帯森林保護団体（以下、RFJ）の代表、南研子でした。長老ラオーニとの出会いを機に、何か力になりたいとの一心で団体を設立しました。この時は、世界ツアーの甲斐あって、世界銀行がダム建設の融資を取り下げ、その計画は眠ることとなりました。

それから24年、資源大国ブラジルは今、うなぎ上りで経済成長を遂げています。前述のベロモ

ンチ水力発電ダム計画はまさに1989年に取り下げられた計画が息を吹き返したものです。技術の発展とは裏腹に、当団体の設立からジャングルの開発は進む一方で、このダム建設がまさにその状況を象徴しています。



2009年ベロモンチ水力発電ダム計画撤回の抗議集会にて、ラオーニ（左）とメガロン（右）

■ 先住民支援＝森林保全

私たちRFJの支援対象地域は、ブラジルのちょうど真ん中に位置する、シングー先住民国立公園です。当地は18万㎦（日本の本州とほぼ同じ）の面積を有し、この広大なジャングルの中には、およそ17部族、2万人の先住民が部族ごとに暮らしています。先住民たちは私たちと同じアジア人の顔をしており、赤ちゃんには蒙古斑もうこもあります。彼らの自給自足の暮らしにはもちろん、電気やガス、水道はありません。お金も使いません。集落とその周りのジャングルが彼らにとっての生

きる場です。

こちら側から見れば、「原始的」な暮らしかもしれませんが、彼らの世界には自殺、いじめ、殺人、寝たきりがありません。大家族が大きな家に暮らし、孤独ありません。過酷な自然の中で、毎日体を動かし、畑を耕し、祭りで踊り・歌い、男も女も子供もたくましく穏やかに生きています。

アマゾンから日本へ

ひとたびシグー先住民国立公園の境界線を越えれば、赤土がむきだしの広大な開発地が広がります。牧場、穀物畑、鉱物採掘、ダム建設もそうです。1988年から2012年までの間、消失した森林面積は日本全土の面積を上回り、今もまだ森林破壊は進んでいます。

鶏肉や大豆など、ここで生産されたものは、日本に暮らす私たちの食卓にも届いています。私もRFJのスタッフとなり、初めて現地で開発の現状を目の当たりにしたとき、ただごとではないこの事態に、自分が加担していることに深く衝撃を受けました。お金の力で、ジャングルや先住民たちの暮らしを礎に、生活を維持している私たちの社会。「果たしてそれは正しい社会の在り方だろうか？」私たちが活動をする想いの発端は、そこへの疑問にあります。女性のスタッフばかりで、必ず毎年現地へ足を運び、数週間先住民と共に暮らし、支援金を大事に、少ない人数で活動をしているNPO法人です。

RFJ、現地での活動

現在の取り組みの柱は“養蜂”です。設立からこれまで、植林、医療、教育、さまざまな支援を行ってきました。私たちはこちらから提案することはなく、先住民からの声のみを反映しながら、プロジェクトを実施してきました。

養蜂事業はシグー川上流域の9部族で2011年から継続しています。養蜂は、自然や先住民の文化へ悪影響がほとんどありません。ブラジル人

の養蜂専門家が年3～4回、各集落を回り、視察指導を行っています。回り、と言っても広大なジャングルの中に点在する集落、移動は容易ではありません。数日かけてやっと一つ目の集落に入ります。

世界でも蜂の減少が言われている現在、幸いにも現地には蜂が多数生息しており、植物の受粉を助ける蜂を保全することは現地の自然を維持することと等しく、とても重要です。シグー国立公園の周囲では、森を全滅するかのような勢いで開発が進んでいます。そのため、近い将来に先住民たちは、通貨を導入して生きていかななくてはならないかもしれません。養蜂によって収穫された蜂蜜がいずれ通貨経済に入っていく際の収入源となってくれることも養蜂事業を進める一つの目的です。

2013年からはカマユラ族の集落にて女性による原種作物の栽培事業も始まります。自然破壊に伴い、植生は大きく変化しました。それを心配した女性たちが立ち上がり、自分たちで原種を維持していく事業を始めました。

アマゾンからのメッセージ

先住民たちはブラジルという国がこの地にできるもっと前、約1万年以上前から森と川の恵みで暮らしを営んできました。もちろん、現在私たちの社会が歩んでいる資本主義の生まれるもっと前です。そして、現地のジャングルは「地球の肺」と言われるとおり、次世代にも大切な存在です。先住民の社会は私たちに大きな問いを投げかけます。そして、私たちRFJは、現地支援はもちろん、彼らから学んだことから、今私たちが信じているこの社会の仕組みを皆さんとともに考えていきたいと思っています。